

えるやいかに聲ふりたて、鈴虫のねになきいつる人もありけり  
白杵の海よする渚の波の音を君は心に何と聞くらん  
水無月の照る日の色に咲きいてんを年ふる里のなてしこの花

遠山霞

やまびと

うす墨の繪にも似たりや籠路をれはるになして霞む遠山  
禰姫の花のすかたやかくすらん春のみ山は霞たなひく

若菜

出て見よ里の乙女等打つれて雪の消間に若菜つむなり  
たらちねのためと思へは何かわらん雲かき分けて根芹つむとも

俳句

脊戸口の棄業に迷ふ胡蝶かな  
君言はず花こゝろなく散りかゝる  
酒醒めて夜寒奇なり春の雪  
春雨のふる夕暮や渡船  
奥ゆかし短冊たるゝ花の枝  
春風や勇士の墓表三千基  
増荒雄の魂かほる梅の花  
さらでだに眠たきものを春の雨

秋 琴

蘭 溪

白 兔

許された花折りかねてながめけり  
男子窩廬にあり春は脾肉の歎に堪えず  
桃をめで梅につれなし春の雨

花五句

墨染の袖に散る花あはれなり  
花の庵あるほどの厄は十九とよ  
振りかへりく花の夕かな  
吉野山乞食も花の小酒盛  
花の蔭に嫗のひとり何を泣く

蝶 二  
旭 露  
松

隨菟錄 (第七)

片嶺芝園

片嶺君園中生靈芝見需詩二十八字塞責

東京 高嶋九峰

昭朝奇瑞詎須論秀色儘鍾詞客門金殿玉墀非我事好將幽蕙伴雲根

增野樸坡曰。清想寄托。其人宛然

贈片嶺芝園

東京 横川唐陽

庭戸春風靄九莖生及時德能霑艸木命豈在蒼龜和氣年年結靈光箇々奇題詩彩箋上  
五色愧僂芝

森槐雨曰。澹然落筆。只覺春煦飄然。自帶壽相。此爲難得。